

欧州通貨と巨額な身代金

新井宏

通貨の歴史は計量の歴史でもある。金貨銀貨の計量こそ、いづこの国でも計量制度を支えてきた。

ところで、歴史に関する本を読んでいると、よく巨額な単位が出てくる。例えば、日光東照宮に五十一万八千両をかけたとか、鴻池など大阪商人が五千万両の貸付金により大名の年貢の七十五パーセントを押えていたとか、薩摩藩の調所笑左衛門が五百万両の借金を踏み倒したとか等々である。

巨額の話なので実感は乏しいが、それでも日本の話なので判る。一両は、金の重量にすれば(平均的に)十グラム程度で、おおよそ米一石の価格であり、江戸時代には、一人当たり二両ほどあれば、すなわち金二十グラムほどあれば、なんとか生活できた。

ところが欧州の話となると、判らぬまま読み飛ばしている場合が多いだろう。例えば、身代金や賠償金の場合である。

英国リチャード獅子王が第三次十字軍の帰路、オーストリアに囚われた時に、身代金として十五万マルクを支払った。

フランス王の聖ルイ九世がエジプト人の捕虜になった時は五十万リーブルであった。

また、フランス王フランソワ一世が神聖ローマ帝国皇帝カール五世の捕虜になった時は四十万デュカート、ルネッサンスの女傑カテリーナ・スフォルツァ伯爵夫人がチェーザレ・ボルジアから釈放された時は二万五千デュカートであった。

生麦事件では英国艦隊の攻撃を避けるため老中小笠原長行が独断で十万ポンド支払った。

ほかにも、富豪フッガー家最盛期の資産は七百万フローリンあったとか、法王レオ十世が四百五十万デュカートの浪費をしたための穴埋めに発行した免罪符がルターの宗教改革を呼んだとか、フランソワ一世が死んだ時にリヨン銀行に実質二百万エキュの借金があったとか、スペイン王フェリペ二世が破産した時に、収入は五百万デュカートなのに負債が二千万デュカートもあったとか、ポルトガル王室も破産時に、利子負担だけで年三十万デュカートもあったとか、健全財政のヴェネチアでさえも一千万デュカートの国債を発行していた等々、枚挙にいとまがない。

通貨や為替について正確に知ることは、現代でさえかなり難しい。そうであれば、地域的、歴史的な通貨などについては、もはや、お手上げとなるのであろうか。

ところが、そうでもない。

ローマ時代を含めて、欧州通貨の基本は金貨であり、地中海時代のドラクマ金貨も、ローマ期のソリドス金貨も、中世以降のフランスのエキュ金貨も、イタリアのフローリン金貨、デュカート金貨も、スペインのエスクード金貨も、おおよそ三グラムから四グラムなのである。

しかも庶民の一人当たり生活費は、これも面白いことに、日本と同じく金で二十グラム

程度、すなわち欧州の金貨六枚程度であった。したがって、フランソワ一世の身代金は六万人分、レオ十世の浪費は七十万人分の生活費、などと計算できる。

なお、マルクは銀の重量で二百四十グラムを意味し金貨四枚相当、リーブル(トルノワ)はエキュ金貨の半分程の価値であった。

ついでながら、英国ポンドは金八グラム、米ドルは金一・七グラムであった。

いつの時代、どの地域でも、金一グラムで買える米や小麦粉の重量は、ほぼ二十キロ程度。今でも国際的に見れば、大体そんなところであろうか。簡単なことなので、ぜひ覚えておくと良いと思う。

(韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)